

美香ちゃん

発行：青木美香後援会
事務局：観測船「ふじ」内
編集責任：小元久仁夫

ゲリラ部隊長出陣！

後援会の有志十名は、果敢にも延々二千キロにわたる氷雪の無人地帯に、三ヶ月にわたる青木美香後援の一大キャンペーンを試みた。風の音しか知らぬ内陸の雪、茫漠とした雪原に群がり立つサスツルギとドリフト、果てはやまと山脈に雪上車のエンジンの音と共に、美香さんの「南極の恋人」の歌声を響かせてきた。これが青木美香後援会内陸支部である。

支部といっても会員が増えて出来たものではない。店主が番頭を兼ねたようなものである。簡単に言えば、馬の耳に念仏をとなえながら、地方のドサ廻りをしたドンキホーテ的集団である。

しかしながら、南極という他の社会から隔絶された社会において後援会活動を行う場合、当然その目的は限られてくる。まず後援会が存在することの一つの大きな意義を持つ。そしてそれが美香さんに励ましを与え、精神的なバックボーンとなることが出来る。それと共に後援会員どうしが青木美香という一人の女性を媒介として親睦を深め、越冬生活を楽しむことが出来る。私も旅行中、忙しい通信時間をさいてもらって、美香さんにた

びたび電報を打った。旅行隊員は熱心に彼女の歌声を流し、また自ら歌い、同じ顔ぶれの三ヶ月間であったが、彼女のおかげで話題に事欠かなかった。中でも、小元ヒラ会員の乗るKD六八は熱心であった。また、前田隊員は新婚はやほやでありながら、勇敢にも自ら副支部長をかって出て、腹脂部長（旅行隊員の腹脂量トップ）におさまった。頭のはげかった者や腹の出ている者が特に熱心であったようだ。私はそういう特徴を持ってないが、内心は彼らに負けず劣らずのつもりである。

支部は基地に帰った。「ふじ」に乗って日本への帰途にある。支部は解散すべきか。「ふじ」はヒセツトされた。楽しみは映画と酒。妻や恋人にはもうすぐ会えるが、いつのことか分からない。日本は学生運動が荒れ狂い、学生内部で各派の対立は激しい。後援会も、海氷に風でクラックが出来るように割れてきた。十次隊は何事も皆一緒にやってきた。美香さんの第一便や電報には、会員の一部の名前が出てくる。世に女は十五億、日本に美人は五万といえる。さあどうする。

現会長は頭に湯気を立てているが、今一つ物足りない。事務局長は腹にいちもつありそうだ。後援会の将来やいかに！

こういう事態に立ち至り、いつ冷戦から開戦に移るか分らない。混戦が予想される。ここに私は強力なゲリラ部隊として、内陸支部の存在を必要と感じている。最後に、美香さんに捧げるうたを…。

雪の無限のひろがり

吹雪の時は波立つ荒海の如く

かんかん照りの時は砂漠の如く

陽が傾けば鈍く光る海原

陽が地平線にかかるピンクの時

それは雪だけの持つ景色にかえる

雪はいろんな顔を持つ

そこにはただ美しく香る青い木

(もと内陸支部長 上田 豊)

「司会業に専念しては…」

§ 川口副隊長に聞く §

編集子のぶしつけな質問にズバリズバリと厳しく答える言葉の裏には、「可愛い妹」の成長を見守る優しさがあつた。以下は「ぶじ」船内での副隊長と事務局長とのあつた日の対話の要旨である。

青木美香さんとはいつ頃からの付き合いですか？

川口 「昭和四十年頃だったと思う。七次隊の出発直後でした。極地部の僕の部屋に時々遊びにきました。『お食事まででしょ？』と言いなながら、弁当や果物をよく持ってきてくれましたよ。とてもいい子です。」

その頃、彼女は何をしていましたか？

川口 「南極放送の関係で、家族会等と接触していた他、テレビのちょい役にも出ていたようです。元来彼女は日本短波のアナウンサーではなくて、最初からタレントだった。自分でそう自己紹介していました。」

彼女の容貌の特色は？

川口 「背は僕よりちょっと高い位。スタイルがとっても良い。」

肉体派ですか？

川口 「いや、そうでもない。むしろ、スラットしていてスマートです。」

何才ですか？

川口 「(しばらく考えて)二十五才くらいだと思つ。」

独身ですか？

川口 「(きつぱりと)それは間違いない。」

彼女の魅力は？

川口 「仕事に対して非常に積極的なところ。」

今後、彼女が歩むべき方向について、どう思いますか？

川口 「彼女は頭の回転が良いし、博学さもある。だから女優や歌手としてよりも、むしろ司会者として自分の個性を伸ばしていった方が良いと思う。」

後援会についてどう思いますか？

川口 「彼女が、自分で今後どういう方向に進みたがっているのかによって違います。後援会という大げなものでもなくとも、彼女とは利害関係が全くなく、適当に若く、適当にインテリの集まっている観測隊員と付き合うことは、彼女にとって楽しいことではないでしょうか。」

(文責 成瀬)

青木美香と私

昨年、いや一昨年の何月でしたか、調達で忙しいある日、場所は横須賀の田浦港、お昼頃の出来事と記憶しています。

たまたま「ふじ」に来ていた彼女と初めて逢い、いろ

いろと話をした思い出が懐かしく、まるで昨日の出来事のようによみがえってきます。綺麗なブルーのスカートに身を包み、心持ち頭を前にかしげて、スラットした上背と黒いヒールが良く似合う……。全体があかぬけたその容姿を見て、ああいい線いってるなあと思ったのは私一人だけではなかったようです。

「皆様ご苦勞様です。お忙しいようですね。」と、軟らかなそして親しみやすいムードで語りかけてきました。

「今が一番忙しく、大変な時なんですよ。」

「そうでしょうね。出発前はくれぐれもお身体を大事にして下さいね。」

「ハ〜イ……。どうも答えがカタかったようです。」

「それはそうと貴女(その時どう青木さんと呼んだか記憶してないが…)の声は私何度も聞き、聞かたびに基地でいろいろと貴女の事話したものですよ。」

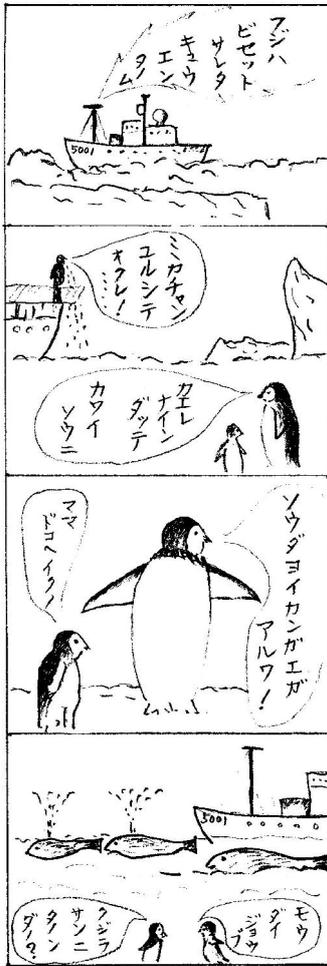
「そうですか。それはそれは光栄ですわ!」

カールした髪は黒々と艶があり、きゃしゃな指には薄っすらとピンクのマニキュアが塗られていた。軽く頭を下げた髪に、小さな時計をはめた右手がそつと触った。それは本当に女性的な仕種で、芸能人的な演技ではなかった。本当にすまなさそうな顔をして、「失礼いたしました。私のこと、今後ともよろしくお見知りおき下さい。」と。

そして横書きで色刷りの名刺を差し出した。私は受け取

南極太郎

ポーリン作



りながら、「私石渡です。」とぶつきらぼうに自分に言い聞かせるように言った。

「あら、石渡さんですか。よく存じております。前にお宅へ伺い、皆様の声を録音させて頂きました…。そうですか、また行かれるのですか。本当にご苦労様です。」

本当に大変と、薄く綺麗に化粧したピンクよりも紅色に近い唇。黒くうれいを持った目、全体的にしまった顔を曇らせた、あの日の語らいの一時を思い出すのです。

「南極放送は楽しみの一つなのですが、非常に聞きにくく、家族の声はなかなか聞こえてきません。でも、貴女の『青木美香です。』と始まる綺麗な声だけがいつも聞こえることは嬉しいです。本当ですよ！」

「あら！ そんな事おっしゃってよろしんですか。奥様に申し上げますわよ…。」軽く睨み返すような目の輝きと紅の口元には、無限の喜びが籠っていたように思われ

た。

「私は思うのですがね、今までどおりのマンネリ化した放送で良いのでしょうか？ 何でも、良いにつけ悪いにつけ反響があつて前向きになるのではないのでしょうか？」と。

彼女は一瞬とまどつたように瞬きし、形よく揃った脚を前に出しながら、

「私は一番それを心配しております。本当に本当に皆様のアドバイスが欲しいのです。」と語っていた。

私はこの言葉を聞きながら、曲がり角に来ている青木美香をつくづくと眺めたのでした。

(石渡 真平)

編集後記

今頃はヨーロッパでお楽しみ最中だったのに、と思う人。

昨年写し損ねたオーロラを写す人。
ヘルスメーターを眺め、そして残り少ないアルコールのビンをウラメシゲに眺める人。 人さまさま。
次号もご協力よろしく。

ポーリン